

戦国の設楽原へ…七つの入り口

- ① 連吾川―なぜ、最前線に選択されたか？
- ② 馬防柵―どのように作られたか？
- ③ 火縄銃―当時の鉄炮は、残っているか？
- ④ 三段撃―「鉄炮計を相加」とは、どんな戦い方か？
- ⑤ 古文書―戦いは、どのように伝えられてきたか？
- ⑥ 村人―戦いの時、どうしていたか？
- ⑦ 古戦場の塚―点在する武田ゆかりの塚が語るものは？

1 野田と長篠の間「設楽原」

天正三年のことである。甲州の武田軍は、再び三河進出を試みた。

□武田軍、徳川方の長篠城を囲む

五月一日、奥平信昌以下五百の城兵が守る長篠城を武田軍が囲んだ。五月八日猛攻を開始し、十四日、城兵は本丸と二の丸に追いつめられた。

五月十三日、信長は長篠救援のため岐阜を出発した。

□織田・徳川軍、設楽原で待つ

途中、岡崎城・牛窪城・野田を経て、十八日、設楽郷極楽寺山に本陣を構えた。そして、設楽郷に「敵方へ不見様二段々に御人数三万計立置」、連吾川を前に「馬塞の為柵を」付けて、武田軍を待った。（引用は『信長公記』）

武田軍の目的は、長篠城の攻略であり、織田・徳川連合軍の目的は長篠城救援である。しかし、事は武田勝頼と織田信長の戦国対決へと進んだ。信長は長篠の手前設楽郷極楽寺山に本陣を構え、連吾川の先には軍を進めようとしなかった。野田と長篠の間の「設楽原」は、突如歴史の表舞台に登場することになった。

五月二十一日、鶯ヶ巣攻めの火縄銃の響く中、武田軍は連吾川を越えて決戦を挑んだ。柵際での激しい攻防は、鉄炮で待つ連合軍の銃弾が次第に武田軍を圧倒し、武田軍は敗退した。

殆どが時間の霧に包まれているが、設楽原を歩くと、天正の匂いを今も感じることができる。

2 戦国の設楽原へ：七つの入り口

入り口1

連吾川―なぜ、最前線に選択されたか？

設楽原を縦断する何本かの川の中で、連吾川を選択させたものは何か。五反田川、連吾川、大宮川は何れも「かんぼう」の山並みを水源としており、流域はよく似た地形であるが・・・

①信長軍は、十八日の設楽原進出と同時に川沿いに柵構築を始めたと思われる。この時点で連吾川を選択は全軍に指示されていたことになる。

・布陣の基本は、自軍の守りよさとともに、武田軍に滝川を渡河させて西への進出を促がすものでなければならない。

・長篠方面から西を望むと、直ぐ向こうの有海台地がさえぎってその先は見えない。極楽寺から東の長篠方面を見ると、信玄台地が壁になって先は見えない。この見通しのきかない二つの大きな丘陵を避けて、西に半分開けた連吾川を選択した。この川筋は、一部ではあるが極楽寺から見通しが利く。見通しの利く一続きの場所であることが、戦線選択の理由？

②この選択は、地形を熟知している地元の情報によると思われる。布陣直前の五月十五日、長篠

城から岡崎城に届けられた鳥居強右衛門の情報も、その脱出コースからみて有力な手がかりを提供したのだろうか。

入り口2

馬防柵—どのようにつくられたか？

「馬塞の為柵を」つけたと『信長公記』が記す柵は、他の史料からも、二重三重に設置されたことはまちがいないと思われる。ところが、どこへ二重なのかその内容は記されていない。また、大量の資材の調達を記す文献も殆どない。

①地元史料の『長篠日記』系がいう「連吾橋」の南起点は地形から異論がない。北の終点は、須長地区の「浜田」と「森長」の二つの地名があがっている。

②現在、連吾川の中程、柳田地区の手前に馬防柵が再現されている。川岸からある程度距離があり、低地の水田地帯が中位段丘に変わる境目に、柵が設置してある。

これは、一重目か、二重目か？

④柵だけでなく、「堀や土塁」があったという主張がある。連合軍布陣の弾正山台地にも、武田軍布陣の信玄台地にも、陣城の遺構地形が見られるという。

⑤柵を構築するための資材を、どのように調達したか。工期は最大二日半である。

入り口 3

火縄銃―当時の鉄炮は残っているか

設楽原で織田軍が使用した鉄砲は、千挺とも二千挺ともいわれる。いずれにしても当時の大きな数である。現在、設楽原歴史資料館に常設展示される火縄銃はほぼ百挺であるが、当時の鉄砲はない。

①天正三年のこの戦いで使用された火縄銃は、今発見されていない。当時に一番近い年代のものとして、京都の龍源院砲（天正十一年の墨書）が知られている。そこに記されている「喜蔵とりつき」の名は、この戦いに参戦した信長配下の武将金森長近の養子金森可重のことである。

養父長近（『信長公記』金森五郎八）は、目付として設楽原から鳶ヶ巣攻めに向かっていた

②地元宗堅寺の信玄砲は伝承からいっても当時に近い時期のものと思われるが、銃身のみで木部は残っていない。玉鑄型と烏口も一緒に伝えられている。

③信玄砲も龍源院砲もどちらも十三匁筒で、口径は二十ミリと比較的大型である。ところが設楽原で発見されている鉛玉は二から五匁程度で、一回り小さい。当然腐食して小型にはなっているであろうが、この差をどう見るか。

入り口4

三段撃―「鉄砲計を相加」とは、どんな戦いか？

『信長公記』は、連合軍の鉄砲使用を「御人数一首も御出なく…鉄砲計を相加」と記し、鉄砲の使用が中心の戦いであったという。ここでいう「鉄砲計を相加」とは、どんな戦い方であったのか。柵を盾にして、次々に撃ち続けるということは、二段三段の構えをどうつくるかということになる。「三段撃」の言葉はこの想定の一つとして使用されてきたと思われる

①「定説に従えば・鉄砲衆が・目の前に敵がいるいにかかわらず、千挺ずつ絶え間なしに発砲を続けたことになる」という。ここで言う内容は、もともと定説と呼べるだろうか。

②「第一の柵と第二の柵の間に銃兵を三列に並べて動かすことは、空間的に全く不可能である」とみる見解があるが、第一と第二の柵はどんな位置関係なのだろうか。「不可能」といえるのはどういう根拠なのか？

④「鉄砲計を相加」とは、具体的にどのような撃ち方が想定できるか？個別発射と一斉発射をどう見ているか？

入り口5

古文書―戦いはどのように伝えられてきたか？

戦いの後、比較的早い時期に記されたものとして、

- ・『信長公記』 太田牛一、『信長記』 小瀬甫庵、『甲陽軍鑑』 小幡景憲、『松平記』 作者不詳、『当代記』 作者不詳、『三河物語』 大久保忠教
- ・『多聞院日記』 多聞院主英俊、『兼見卿記』 吉田神社（京都）の吉田兼見
- ・『寛永諸家系図伝』 江戸幕府編纂、奥平系史料

地元では

- ①戦いを記している戦記としては、『長篠日記』系統の写本が多い。
- ②墳墓や古戦場を記している地誌は三点である。『戦場考』、『続柳影』、『参河名所図絵』。
- ③家譜系統としては、『菅沼家譜』と『菅沼記』（新城加藤家文書）等である。

入り口6

村人―戦いの時どうしていたか？

主戦場に住む当時の村人について、次のような伝承がある。

- 1 竹広近辺の百姓は、戦いの時「かんぼう山」東端である出沢の奥の「小屋久保（こやんくぼ）」へ避難していた。

- 2 川路の勝樂寺では、寺僧たちが本尊を長良村（元鳳来寺村）に避難させた。

3 当時の設楽原には、武田方の移住者が早くから定住し、鍛冶や野菜種の販売や傘づくり

あたっていたという。（『続柳陰』に「秋山伯耆商人トナリテ此村ニ居テ」とある）

戦い直後の夏、現在の信玄塚周辺で「蜂がでて、村人や通行人を困らせた」ので、大たいまつを焚いて虫を退治したという。それが途切れることなく今の「火おんどり」として伝えられてきたのには、武田将兵に対する村人の身近さがあったように思われる。必要があつて大たいまつを焚いたその年が終わつても、夏の行事として絶やすことなく続けている。

古戦場一帯は早くから地元の設楽氏支配の地であり、当時は設楽甚三郎貞通が領主であるが、少し前までは本家にあたる設楽神三郎清政の支配地であつたはずである。

清政は、戦い一年前の天正二年、北条を頼つてこの地を離れている。一族の内紛である。

入り口

古戦場の塚―点在する武田ゆかりの塚の語るものは？

古戦場の各所に、天正の戦いで倒れた武田将兵の塚が祀られている。大正三年に地元の顕彰会がいくつかを新しくしているが、これらの殆どは江戸時代の早い時期から、戦死の地とされる場所近くに祀られている。当時徳川方であるこの地で、誰がこれらの塚を最初に祀ったのだろうか。

戦いからおよそ百五十年、新城の太田白雪が書いた『続柳陰』に、ここで討ち死にした武田方

武將十六人の名が記されている。幕末の『三河名所図絵』には三十人の名が記され、戦い直後の慶長の記録といわれる『戦場考』には、二十六人の墳墓が記録されている。

- ・戦場考の墳墓位置は、有海一、設楽原二十五である。長篠地区、乗本地区についての記述はない。明治後の墳墓三調査で見ると、長篠五、乗本三、有海十、設楽原三十九である。
- ・古戦場の墳墓は、時代とともに移動や改変の危険を孕み続けている。江戸後期の記録である『参河志』の馬場信房の項に「墳長篠にある事不審」の記述がある。昭和の柿原調査では、「五輪等を一所に」まとめた例をあげて、碑の移動を警告している。